

センター全体の活動報告

センター全体の活動一覧

月 日	活 動 報 告
4月22日	四天王寺聖霊会鑑賞会
5月24日	第一回祭礼遺産研究例会
5月26日	第3回ワークショップ「なにわ・大阪を歩く―天王寺七坂を完全踏破―」（大阪市天王寺区）
6月6日	長期インターンシップ実習開始
6月28日	第一回学芸遺産・歴史資料遺産研究例会
6月29日	『難波潟No.6』刊行
6月30日	第5回NOCHSレクチャーシリーズ「大阪のモノづくりのおもしろさ」
7月14日	国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産―中国・韓国・日本の対話―」
7月18日	第一回「豊臣期大坂図屏風」研究会
7月30日	第一回生活文化遺産研究例会
7月31日	『Occasional paperNo.5 地域連携企画第2弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」』刊行
9月14日	第二回「豊臣期大坂図屏風」研究会
9月21日	研究進捗状況報告書文部科学省へ提出
9月28日	国際シンポジウム「新発見「豊臣期大坂図屏風」の魅力―オーストリア・グラーツの古城と日本―」
9月29日	朝日・大学パートナーズシンポジウム「新発見「豊臣期大坂図屏風」を読む」
10月14日	公開シンポジウム「浪華風俗を描く 菅楯彦の世界」（芦屋市立美術博物館との共催）
10月28日	地域連携企画第3弾「もめん博物館in平野」（大阪市平野区）
11月11日	『難波潟No.7』刊行
11月24日	第4回NOCHS文化遺産学フォーラム「なにわ・大阪の文化力―大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る―」
11月24日～ 12月1日	第4回NOCHS文化遺産学フォーラム関連展示 企画展「なにわ・大阪の文化力―大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る―」（津田秀夫文庫古文書・牧村史陽氏旧蔵写真・本山コレクション拓本展）
11月29日	第4回NOCHS文化遺産学フォーラム関連行事 パネルディスカッション「回想・津田秀夫と歴史学」
12月18日	第二回生活文化遺産研究例会
12月19日	副読本作成検討会
12月22日	長期インターンシップ実習生報告会
1月16日	第6回NOCHSレクチャーシリーズ「豊臣期大坂城を掘る」
1月18日	第二回祭礼遺産研究例会
1月22日	第二回歴史資料遺産・学芸遺産研究例会
1月31日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書5 大坂代官竹垣直道日記（二）』刊行
2月16日	第4回ワークショップ「なにわの伝統野菜交流会」
2月29日	『難波潟No.8』刊行
2月28日～ 3月1日	文化遺産視察（長崎市）
3月11日	関西大学日本・EU研究センター開所記念 第1回Japan Week「豊臣期大坂図屏風」フォーラム
3月14日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書6 神社を中心とする村落生活調査報告（二）』刊行
3月31日	『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』刊行
3月31日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書7 木崎愛吉旧蔵本山コレクション金石文拓本選』刊行
3月31日	『なにわ・大阪文化遺産学叢書8 大阪の伝統工芸―茶湯釜と大阪浪華錫器―』刊行
3月31日	『Occasional paperNo.6 地域連携企画第3弾「もめん博物館in平野」』刊行

3月末現在

NOCHS文化遺産学フォーラム

- ・第4回：「なにわ・大阪の文化力—大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る—」

日時：平成19年11月24日

会場：関西大学千里山キャンパス新関西大学会館北棟ホール

参加者数：270名

第一部では、能勢人形浄瑠璃鹿角座を招き、現在も能勢の地に息づく文化遺産である人形浄瑠璃「能勢三番叟」「傾城阿波の鳴門—巡礼歌の段—」の公演を行った。第二部では、基調講演に中野三敏氏を迎え、版元の丹波屋理兵衛の活動を通じて18世紀「なにわ」の文化が江戸文化に大きな影響を与えたことが指摘された。続いて、井上宏氏・近江晴子氏・酒井一氏・水田紀久氏・センター長の高橋隆博がそれぞれの研究の立場から「なにわ」「大阪の文化」の魅力について討論した。詳細は、各研究プロジェクトの活動（学芸遺産研究プロジェクト）を参照。



傾城阿波の鳴門—巡礼歌の段—



パネルディスカッション

*第4回NOCHS文化遺産学フォーラム関連事業

1. 企画展「なにわ・大阪の文化力—大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る—」

日時：平成19年11月24日～12月1日

会場：関西大学博物館第二展示室

来館者数：297名

関西大学博物館第二展示室において、本山コレクション金石文拓本・津田秀夫文庫古文書・牧村史陽氏旧蔵写真を展示し、研究員による解説を随時実施した。大学の授業でも活用され、大阪の歴史家・郷土史家について学部生・大学院生が学ぶよい機会となった。



展示解説をする研究員

2. パネルディスカッション「回想・津田秀夫と歴史学」

日時：平成19年11月29日

会場：なにわ・大阪文化遺産学研究センター
文化遺産実習・展示室

参加者数：52名

パネリスト

奥田 晴樹氏（金沢大学教授）

「津田秀夫先生—その人物と学問」

岩城 卓二氏（京都大学准教授）

「回想・津田秀夫と歴史学」

常松 隆嗣氏（関西大学非常勤講師）

コーディネーター

藪田 貫（総括プロジェクトリーダー）

講師三名が、恩師・津田秀夫氏との思い出を語り、大阪の歴史学者としての津田秀夫氏の魅力とその歴史学について討論した。また、コーディネーターをつとめた藪田総括プロジェクトリーダーは、津田秀夫氏の収集した古文書類を保管し、毎年目録を出す作業を通じて、津田秀夫氏が関西大学に残した軌跡



奥田 晴樹氏



岩城 卓二氏



常松 隆嗣氏

についてコメントを加えた。

地域連携企画

・第3弾：「もめん博物館in平野」

日時：平成19年10月28日

会場：大阪市平野区・全興寺

参加者数：240名

企画の立案と準備は、今年度受け入れた長期インターンシップ実習生により進められた。企画のねらいの一つは、開催場所として借りることができた全興寺境内で子供たちに糸つむぎや綿織りの体験をしてもらい、同時にパネルによって平野区にゆかりのある木綿の歴史を知ってもらうという取り組みである。もう一つは、この日は、「町ぐるみ博物館」が実施されており、多くの人が訪れていたため、町へ出かけてアンケートをとることであった。いずれも、現在の平野と歴史的に形成された平野の町を考えるよい機会となった。



「もめん博物館」に集まる子どもたち

ワークショップ

・第3回：「なにわ・大阪を歩く 天王寺七坂を完全踏破～四天王寺から生國魂神社～」

日時：平成19年5月26日

場所：大阪市天王寺区

参加者数：25名

大阪の文化遺産が多く存在する四天王寺から生國魂神社までのルートを学内で応募した学部生・大学院生らと歩いた。墓碑や「天王寺七坂」など地域に根づく文化遺産を体感することによって理解を深めることができた。



現地説明をする研究員

・第4回：「なにわの伝統野菜交流会」

日時：平成20年2月16日

会場：関西大学天六キャンパス
有鄰館会議室

参加者数：30名

なにわの伝統野菜の栽培・普及について取り組んでいる大阪市内の小学校を中心に、それぞれの情報交換の場を設けることが主眼となった。また、各小学校で野菜の作り方を指導している方を招いて、地域における活動やその問題点についても議論を深めた。今後、当センターがなにわの伝統野菜を通して学校教育の場とどのようなつながりを持つことができるのかを考えるよい機会となった。詳細は、各研究プロジェクトの活動（生活文化遺産研究プロジェクト）を参照。



伝統野菜と教育について議論する参加者

NOCHSレクチャーシリーズ

・第5回：「大阪のモノづくりのおもしろさ」

日時：平成19年6月30日

会場：なにわ・大阪文化遺産学研究センター
文化遺産実習・展示室

参加者数：78名

大阪のモノづくりとそれにもとづく町づくりについて、社会学部の大西正曹氏と水戸祥登氏、佐藤元相氏を招いてディスカッションを行った。現代の大阪から生み出されるモノづくりとその現場の声を聞くことができた。昨年度の第3回文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」を受けて大阪の町づくりとモノづくりの関係を改めて考えることができた。詳細は、各研究プロジェクトの活動（生活文化遺産研究プロジェクト）を参照。



鼎談をする講演者

・第6回：「豊臣期大坂城を掘る」

日時：平成20年1月16日

会場：なにわ・大阪文化遺産学研究センター
文化遺産実習・展示室

参加者数：48名

報告者：

松尾 信裕氏（大阪城天守閣館長）

「豊臣期大坂の景観」

杉本 厚典氏（財団法人大阪市文化財協会
学芸員）

「大坂城三ノ丸北辺の発掘調査から」

豊臣期の大坂について、考古学の視点から都市の空間構造について議論する場を設けた。松尾氏は、中世から豊臣期初期・豊臣期前期・豊臣期後期・豊臣家滅亡期に大坂の景観がいかに変容するのかを大坂城築城や城下町の建設の推移から指摘した。杉本

氏は、大坂城三ノ丸北辺の発掘調査において、陶磁器・漆器・箸・動物骨・魚の骨などの出土物が豊臣期後期の遺構から発見されたことをふまえ「豊臣家最後の晩餐」について言及した。

今年度、センターでは「豊臣期大坂図屏風」の研究を開始し、屏風の中に描かれた大坂城や城下町についての調査を進めているが、今回の企画によって、研究の幅や方向性が広がった。



松尾 信裕氏



杉本 厚典氏

国際シンポジウム

・「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」

日時：平成19年7月14日

会場：関西大学尚文館AV大ホール

参加者数：168名

パネリスト：

楊 志剛氏（復旦大学文物与博物館学系教授）
「人々と文化遺産：上海を中心とした調査より」

吳 恩培氏（蘇州市職業大学呉文化研究所所長）

「蘇州文化と世界文化遺産に登録された蘇州園林」

陳 来生氏（蘇州科技学院管理学院教授）

「伝統文化の保護と観光開発—江南水郷古鎮を例に—」

金 鎬詳氏（叻新羅文化遺産調査団専任研究員）

「歴史の都市、慶州の文化財保存の成果と問題点—そして去りつつある近代遺産—」

金 美貞氏（韓国文化遺産観光コーディネーター）

「観光からみた韓国文化遺産」

奈良俊哉氏（近江八幡市文化政策部文化振興課文化財専門員）

「日本における事例—重要文化的景観選定第1号「近江八幡の水郷」—

コーディネーター

高橋 隆博（センター長）

当センターにおける初の試みとして国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムは、平成18年12月に韓国慶州の文化遺産を調査した際の成果を含んでいる。本シンポジウムでは、人々の生活の中で「文化遺産」がどのように存在しているのかを、中国・韓国・日本それぞれの立場から考えるため、中国から3名、韓国から2名、日本から1名のパネリストを招き、高橋センター長をコーディネーターとしてパネルディスカッションを行った。このシンポジウムの詳細については、来年度に報告書として刊行する予定である。



パネルディスカッション

文化遺産視察

・「長崎の文化遺産～世界遺産登録にむけて～」

日時：平成20年2月28日～3月1日

今年度は、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として世界遺産登録にむけて取り組む長崎県を視察地として選んだ。昨年度の韓国・慶州視察を受けて、東アジアやそれを取りまく歴史的景観について考えるため、視察の中心は長崎市とした。

現地では、長崎県教育庁世界遺産登録推進室や、長崎市文化財課の方に、視察地の解説や世界遺産登録への取り組みの状況・問題点などについてレクチャーを受けた。長崎の教会群や近代化遺産の視察を通して、今後のセンターの取り組みについて重要な示唆を得た。

<行 程>

2月28日

- 9：00 大阪伊丹空港集合
- 9：55 大阪伊丹空港出発
- 11：15 長崎空港到着
- 12：00 バスにて長崎空港出発、長崎市へ
- 13：15 長崎市にて昼食
- 14：05 道の駅「夕陽が丘そとめ」にて外海の文化的景観を遠望
長崎市文化財課と外海教育センターの方にそれぞれ説明を受ける
- 14：30 大野教会視察
- 15：10 長崎県教育庁世界遺産登録室のレクチャーを受ける
「長崎の教会群とキリスト教関連遺産・世界遺産登録に向けた取組」
- 16：00 出津一带を視察（旧出津救助院・出津教会）
- 17：15 枯松神社視察

2月29日

- 9：40 長崎市内視察
日本二十六聖人殉教地・記念館
↓
眼鏡橋
↓

寺町周辺（興福寺・崇福寺など）

- 12：30 昼食
- 13：30 長崎市内南部視察
オランダ坂・東山手地区（町並保存地区）視察
↓
大浦天主堂・グラバー園
- 16：00 長崎の文化的景観を海から視察（三菱重工業長崎造船所・隠れキリシタンの里神ノ島町など）

3月1日

- 9：15 長崎市・出島視察
- 10：00 各自で長崎市内周辺の調査
- 15：00 長崎歴史文化博物館視察
- 18：00 長崎空港到着
- 19：15 長崎空港出発
- 20：20 大阪伊丹空港到着



大野教会にて説明を受ける



センター来訪者

4月～9月

後藤俊明氏（朝日新聞社 朝日・大学パートナーズシンポジウム事務局）

森本俊司氏（朝日新聞社 編集委員）

…9月29日開催「朝日・大学パートナーズシンポジウム 新発見『豊臣期大坂図屏風』を読む」の打ち合わせのため来館。

8月

Dimitri Vanoverbeke（ディミトリ・ファノーヴェルベッケ）氏（ルーヴェン・カトリック大学文学部教授）

…関西大学文学部交換研究員として来学。センター招聘研究員室を使用した。8月8日に「ベルギーにおける日本学の現状」と題して、センターにて報告会を開催。

9月

Franziska Ehmcke（フランチスカ・エムケ）氏（ケルン大学東洋学部教授）

…9月28日・29日開催の「豊臣期大坂図屏風」国際シンポジウムの事前準備のため来館。

12月

藤岡正憲氏（教育出版株式会社 関西支社）

…次年度から始める副読本作成の打ち合わせのため来館。12月19日に副読本作成検討会にてレクチャー。

3月

Peter Pakesch（ペーター・パケシュ）氏（シュタイヤマルク州立博物館ヨアネウム総監督）

Barbara Kaiser（バーバラ・カイザー）氏（エッゲンベルク城博物館主任学芸員）

…第1学舎第1号館の「豊臣期大坂図屏風」復元陶板の竣工式および次年度のグラーツ市での国際シンポジウム打ち合わせのため来館。

出版物

①年次報告書『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』（2008年3月31日刊行）

②なにわ・大阪文化遺産学叢書

5『大坂代官 竹垣直道日記（二）』（2008年1月31日刊行）

6『神社を中心とする村落生活調査報告（二）—大阪府 北河内郡・中河内郡・南河内郡—』（2008年3月14日刊行）

7『木崎愛吉旧蔵本山コレクション金石文拓本選』（2008年3月31日刊行）

8『大阪の伝統工芸—茶湯釜と大阪浪華錫器—』（2008年3月31日刊行）

③NOCHS Occasional Paper

No.5『地域連携企画第2弾 八尾安中新田植田家の文化遺産』（2007年7月31日刊行）

No.6『地域連携企画第3弾 もめん博物館in平野』（2008年3月31日刊行）

④News Letter『難波渦』（詳細は、センター通信参照）

No.6（2007年6月29日刊行）

No.7（2007年11月11日刊行）

No.8（2008年2月29日刊行）

⑤NOCHS MAIL（詳細は、センター通信参照）

第26号～第40号

各プロジェクトの活動報告

祭礼遺産研究プロジェクト

①祭礼に関する調査・記録

初年度・2年目にひきつづき、大阪府下の祭礼・民俗行事の現地調査と写真撮影による記録を行った。特に、大阪市平野区・杭全神社については、10月28日に地域連携企画第3弾として、大阪市平野区周辺を取り上げた。



②文化遺産の視察に出かける

7月に開催した国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」にもとづ

いて、東アジア地域やその他の国際的環境が歴史的に形成した地域を調査するため、今年度は、長崎市へ視察に出かけた(詳細は、全体の活動報告を参照)。

③プロジェクト合同で調査地において公開講座を開催する

10月28日に、他のプロジェクトと合同で、大阪市平野区周辺において地域連携企画を実施した。

④文化遺産インターンシップに学部学生・大学院生を参加させ、卒業論文・修士論文の作成を支援する

インターンシップ実習生として2名の学部生を採用し、調査・研究の支援を行わせた。また、昨年度に引き続き、黒田研究員が指導し、RA内海の補助のもと、『神社を中心とする村落生活調査報告』の調査・翻刻・出版作業に、調査補助員として大学院生を参加させている。

今年度は、2年目(平成18年度)に刊行した「(一)大阪府 大阪市・三島郡・豊能郡」に引き続いて、「(二)大阪府 北河内郡・中河内郡・南河内郡」を刊行した(『なにわ・大阪文化遺産学叢書6』)。また、府下の祭礼・民俗行事の調査にも大学院生たちが参加した。

さらに、大阪府下の神社合祀調査についても、大谷研究員の指導とRA内田の補助のもと、調査補助員として大学院生を積極的に参加させ、調査をすすめている。調査の成果は、今後、大谷研究員が編集し、神社合祀の新聞記事集成を出版する予定である。

今年度は、『大阪朝日新聞』明治38年～39年の神社合祀関連新聞記事を抽出した。

今年度も、上記の調査に参加している大学院生が、その研究成果を修士論文に盛り込んでいる。

⑤RAとして参加し、学位を取得した院生をPDとして採用する

初年度から本研究プロジェクトRAとして採用している内田・内海は、本研究プロジェクトにおける調査・研究の成果をもとに、学位請求論文の作成を

進めてきた。内田は、平成19年11月に関西大学に学位請求論文を提出し、平成20年3月に博士号を取得した。内海は、平成19年10月から平成20年2月まで「上町台地マイルドHOPEゾーン事業 調査研究委託」に採択され、「近世大坂の名所と上町台地」を研究課題とした。内海は、この調査研究をふまえ、博士論文執筆をすすめている。

⑥プロジェクト合同で文化遺産学に関する国際シンポジウムを開催する

7月14日に、関西大学において、国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」を開催した。さらに9月28日の国際シンポジウム「新発見『豊臣期大坂図屏風』の魅力—オーストリア・グラーツの古城と日本—」では、祭礼遺産プロジェクトの調査研究をもとに、黒田研究員が「『豊臣期大坂図屏風』にみる住吉祭の行列」の報告を行い、パネリストとして議論に加わった。

研究例会

第1回：平成19年5月24日

黒田一充（研究員）「津田秀夫文庫本『神社を中心とする村落生活調査報告』について」

…初年度から調査・研究を進めている大阪市史編纂所蔵の津田秀夫氏旧蔵『神社を中心とする村落生活調査報告』の内容と、これまでの調査成果について報告した。



第2回：平成20年1月18日

和住香織（関西大学大学院生）
「明治後期の大阪と神社合祀」

コメンテーター：大谷渡（研究員）

…大阪府下の神社合祀について、その経過と実態について、資料調査の成果を盛り込んだ修士論文の内容を報告した。



10月6日・7日に大谷大学で行われた日本民俗学会第59回年会の第2日目の研究報告に、分科会「肥後和男の宮座調査の再検討」（代表・黒田）として、以下の発表を行った。

黒田一充（研究員）

「肥後調査の新出資料—『神社を中心とする村落生活調査報告』大阪府・兵庫県ほか—」

森本安紀（関西大学大学院）

「肥後和男資料からみる年頭行事」

伊藤信明（和歌山県立文書館・関西大学非常勤講師）

「調査資料を検証する—桜井市北白木の事例より—」

市川秀之（研究員）

「『宮座』誕生—滋賀県下における肥後の宮座調査と宮座概念の形成—」

これらのうち、黒田・森本の発表は、祭礼遺産研究プロジェクトの『神社を中心とする村落生活調査報告』の調査・研究の成果に関する報告である。

⑦「大阪祭礼行事カレンダー」の試作と公開

今年度は、平成19年版の大阪夏祭りカレンダーを作成し、7月7日付の朝日新聞朝刊で紹介された。読者には先着100名でプレゼントとしたが、数日のうちに100名分を突破し、その反響は非常に大きかった。その後、7月の国際シンポジウムやその他研究行事の参加者にも配布した（別紙参照）。

⑧中間報告を『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』として発刊する

今年度の年次報告書『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』には、中間報告書の内容を掲載する（各研究プロジェクト共通事項）。

⑨総括運営委員会のもとで中間総括をするとともに、外部評価委員会による外部評価を受ける

センターでは、総括運営委員会として、学内研究員から構成される推進委員会を設けており、ほぼ毎月1回のペースで委員会を開催しているが、今年度は、中間総括のための推進委員会を開催し、これまでの活動の総括と今後の活動方針を議論している。また、内部評価だけではなく、センターでは3名の外部評価委員を委嘱し、すでに2年目の平成18年10月28日に第1回外部評価委員会を開催し、センターの活動についての外部評価を行い、その内容は年次報告書『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2006』に掲載している。

⑩その他

a. 大阪天満宮調査

研究員の近江晴子氏を中心に大阪天満宮所蔵史料から、近代の天神祭・遷宮・流鏝馬に関する調査を実施した。『なにわ・大阪文化遺産学叢書』として次年度以降に刊行する予定である。

b. 八尾市植田家総合調査

植田家に所蔵されている軸装を中心とした絵画資料の分析については、生活文化遺産研究プロジェクトの長谷研究員が中心となり、本研究プロジェクトRA内田が補助しながら調査研究をすすめている。今年度は、各プロジェクト共同で資料の目録を作成した。

c. 関西大学ミュージアム講座

関西大学博物館では、毎年学内外の研究者を招いて、ひろく地域の人びとに文化遺産についての講演を行うミュージアム講座を開催している。今年のテーマは「なにわ・大阪の文化遺産（二）」で、本研究プロジェクトからは、黒田研究員が講演を行った。

7月4日：黒田一充（研究員）「四季おりおり大阪の祭り」

d. 年次報告書への執筆

研究員の市川秀之は、今年度の年次報告書『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』に研究論文「伝統的都市における民俗の個別性と普遍性—泉佐野を事例として—」を執筆し、RA内海は、赤松麟作版画集「大阪三十六景」について紹介した。

生活文化遺産研究プロジェクト

①辻合喜太郎氏収集の河内木綿コレクションの分類整理に着手する

構想調書の段階では、3年目に着手する予定であったが、2年目（平成18年度）に八尾市立歴史民俗資料館所蔵の辻合コレクションに含まれる『河内木綿譜』の調査を行なった。この調査では、通常のデジタルカメラによる接写のみならず、デジタル・マイクロスコープによる撮影も行い、繊維の計量的な研究を行う基礎データを蓄積した。今後、これらのデータをもとに調査を進める予定である。また、これらと関連して、同資料館が栽培する河内木綿の綿摘みから糸紡ぎまでを体験した。

②工芸品の比較鑄造実験等を行い、文献に記録された技術や伝承技術と比較・検討し、復元する

初年度から継続して、株式会社大阪錫器（大阪市東住吉区田辺）において、錫器の製造工程に関する聞き取り調査と、製造工程に関する技術記録を作成するため、これまでの調査実績を踏まえて、具体的な調査項目の内容と補足調査の内容について確認作業を実施した。また、大阪の鑄物業に関して、重要無形文化財保持者（人間国宝）であった故角谷一圭氏の技術を踏襲する角谷一圭工房（主宰：角谷征一氏）や大阪茶釜を鑄造する濱家の工房などの伝統的鑄造技術や製品を調査し、京都三条釜座の大西清右衛門家などとも比較する予定である。これらの成果についてはNOCHSレクチャーシリーズで公開するとともに、『なにわ・大阪文化遺産学叢書8大阪の伝統工芸—茶湯釜と大阪浪華錫器—』として今年度刊行した。

なお、平成20年3月8日には、日本鉄鋼協会・社会鉄鋼工学部会主催の「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム「鉄—人と道具とその技術—」研究Gr. 発足記念講演会において研究員の吉田晶子とRA宮元が「錫器製造の民俗技術」について報告をした。

③中国の大学、博物館に生活文化遺産と文化遺産学の調査に出かける

7月に開催した国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」にもとづ

いて、東アジア地域やその他の国際的環境が歴史的に形成した地域を調査するため、今年度は、長崎市へ視察に出かけた（詳細は、全体の活動報告を参照）。

④学部生・大学院生を文化遺産インターンシップに参加させ、卒業論文・修士論文の作成を支援する

インターンシップ実習生として2名を採用し、調査・研究の支援を行わせた。今年度は『地域連携企画第3弾 もめん博物館in平野』の立案から参加させた。また、『Occasional Paper No6. もめん博物館in平野』の作成にも従事し、刊行した。

また、今年度も関西大学博物館などの調査にあたっては大学院生に積極的に参加させ、資料の取り扱いや調査方法に習熟する機会を持たせている。調査に参加している大学院生・学部生の多くが、調査成果を卒業論文・修士論文に盛り込んでいる。

⑤RAとして参加し、学位を取得した院生をPDとして採用する

初年度から本研究プロジェクトRAとして採用している宮元・千葉、3年目（平成19年度）からRAとして採用した影山は、本研究プロジェクトにおける調査・研究の成果をもとに、学位請求論文の作成を進めている。

⑥文化遺産学フォーラムおよび文化遺産学国際シンポジウムを開催する

7月14日に開催された国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」において中国・韓国の生活文化について、両国の研究者からその現状について教示を得た。これは当研究プロジェクトRA千葉・PD森本が担当し、来年度報告書を刊行する予定である。

また、同月には研究例会を開催し、『鷺池家文書』の調査・研究の成果について報告した。さらに今年度第2回目の研究例会を開催し、大阪の産業に焦点を当てた報告および保存処理分析作業室での研究成果の報告を行なった。

研究例会

第1回：平成19年7月30日

森本幾子（PD）

「近世大坂商家の婚礼—『鷺池家文書』の研究方

法一」

…『鷺池家文書』の概要と研究の意義について紹介し、『鷺池家文書』から復元した近世大坂の商家の年中行事と献立について報告した。森本は、この報告をもとに、年次報告書に研究ノート「大坂商家の婚礼」を執筆した。



酒井亮介（研究員）
「雑喉場と神平商店」

…森本報告にコメントを加えるとともに、雑喉場の歴史について『鷺池家文書』を生みだした神崎屋平九郎商店を中心に報告した。

近江晴子（祭礼遺産研究プロジェクト研究員）



…森本報告にコメントを加え、近世大坂の商家について紹介した。

第2回：平成19年12月18日

吉田豊氏（堺市博物館学芸員）

「天下の台所・大坂の産業」

…近世における大坂の産業について堺との比較検討から見出される特長と天下の台所と呼ばれた由縁について報告した。



宮元正博（RA）

「錫器の製作工程－大坂錫器を例に－」

…これまでに行なってきた株式会社大阪錫器での調査をもとに、錫器の製作工程に関する研究成果を報告した。

千葉太朗（RA）

「保存処理分析作業室報告－鉄器の保存処理－」

…これまでに当センターで行なってきた鉄器の保存処理に関する報告を行なった。

影山陽子（RA）

「保存処理分析作業室報告－考古遺跡の分析学的研究－」

…これまでに当センターで行なってきた大阪府下

の遺跡から採取した試料を対象にした同位体分析・粒度分析・X線撮像による研究の成果を報告した。



⑦「大阪ものづくり」プランの策定

「大阪ものづくり」プランの策定にあたって、「大阪ものづくり」の現状を理解するために、長年にわたって「大阪ものづくり」を研究してきた関西大学社会学部教授の大西正曹氏と、実際に「大阪ものづくり」の現場において第一線で活躍する企業

家を招き、NOCHSレクチャーシリーズとして開催した。内容は以下の通りである。

第5回NOCHSレクチャーシリーズ

「大阪のモノづくりのおもしろさ」

：平成19年6月30日

大西正曹氏（関西大学社会学部教授）

…これまでの東大阪市を中心とした中小企業に関する調査・研究を紹介し、これからの「大阪のモノづくり」の在り方について講演した。

水戸祥登氏（三陽鉄工株式会社代表取締役）

…「製造業から創造業へ」をキーワードに、自社の取り組みと大阪の中小企業の今後について講演した。

佐藤元相氏（大阪商工会議所東成・生野支部異業種交流会フォーラム・アイ元代表幹事）

…大阪商工会議所東成・生野支部異業種交流会フォーラム・アイの取り組みと、自転車や日用雑貨などの「生野ブランド」の立ち上げと地域の活性化について講演した。

今後は、NOCHSレクチャーシリーズで得た知見をもとに「大阪ものづくり」プランの策定を進める計画である。

⑧生活文化遺産研究プロジェクトの中間報告書を作成し『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』として公表する

今年度の年次報告書『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』には、中間報告書の内容を掲載した。

⑨総括運営委員会のもとで中間総括するとともに、自己点検評価委員会の中間評価を受ける

センターでは、総括運営委員会として、学内研究員から構成される推進委員会を設けており、ほぼ毎月1回のペースで委員会を開催しているが、今年度は、中間総括のための推進委員会を開催し、これまでの活動の総括と今後の活動方針を議論している。また、内部評価だけではなく、センターでは3名の外部評価委員を委嘱し、すでに2年目の平成18年10月28日に第1回外部評価委員会を開催し、センターの活動についての外部評価を行い、その内容は年次報告書『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2006』に掲載している。

⑩その他

a. 保存処理分析作業室における調査・研究

<保存処理部門>

関西大学博物館が所蔵する本山コレクション鉄製品を対象として、保存処理を実施するため選定した資料を借用し、保存処理に着手し、一連の作業を実施した。また、保存処理の実際を大学院生や学部生に体験させるため、可能な作業工程の抽出と具体的な作業工程の内容について検討を開始している。

<分析部門>

分析部門の調査・研究としては、考古遺跡から採取した材のベンゼン-液体シンチレーション法による放射性炭素年代測定を実施した。X線透過撮影による大阪府内の2つの無層理層（三宅西遺跡、池内遺跡）の堆積環境分析を行なった。また、池内遺跡（松原市）や下三橋遺跡（奈良市）などから得られた土層サンプルのX線撮影を進め、今後利用できる資料の蓄積を図っている。これらの成果の一部は、平成19年6月に広島大学で開催された地理科学学会春季学術大会および10月に熊本大学で開催された日本地理学会2007年秋季学術大会で発表した。

保存処理部門・質量分析部門での調査・研究の成果を『なにわ・大阪文化遺産学叢書9 金属製品の保存処理-本山コレクションを対象に-考古遺跡の分析学的研究』として刊行するよう準備を進めている。

b. 八尾市植田家総合調査

初年度から継続して調査研究が進められてきた植田家の民具・陶磁器・書画等について報告書作成にむけて補足調査の実施をはじめとした今後の調査スケジュールの策定を行った。また、平成19年10月に解体整備される植田家の現状について、建物外形や蔵、庭園などを、3Dレーザー・スキャニングシステムを運用してスキャニング調査を行なった。

c. 社寺に神供される魚類・野菜・酒等の原産地と生産組織、その流通形態と配給組織について調査する

初年度から進めてきた大阪市中央卸売市場本場市場資料室所蔵の『鷺池家文書』の調査研究について、近世大阪の食文化からみた商家と地域社会との関係に主眼をおき、これまでの成果をまとめる作業を進

行中である。来年度には、大阪の食文化の調査・研究をまとめた叢書を刊行する予定である。また、今年度も酒井研究員を中心にコンソーシアム大阪での講義や、NPO法人・浪速魚菜の会発行『浮瀬』への執筆を通して、広く大阪の食文化への理解を深める活動をしている。

d. 「なにわの伝統野菜」の栽培

昨年度に引き続き、RA宮元が中心となりセンター棟北側の農園において、「なにわの伝統野菜」のうち、勝間南瓜・玉造黒門越瓜・吹田慈姑・毛馬胡瓜・田辺大根などを栽培している。

e. 「なにわの伝統野菜」を中心とした学校教育との連携

今年度で開催した第4回ワークショップでは、学校教育の場で「なにわの伝統野菜」の保存・活用に取り組む教員を招いた交流会を開いた。これは、大阪府下においてなにわの伝統野菜を教材に活用している学校の協力をもとに祭礼遺産研究プロジェクトRA内海と当研究プロジェクトRA宮元を中心にすすめた研究行事である。

第4回ワークショップ：平成20年2月16日

「なにわの伝統野菜交流会」

学校での取り組み紹介

- ①大阪市立扇町小学校 志村敏子先生による紙芝居上演「大阪なにわ伝統野菜のおはなし」
- ②大阪市立北恩加島小学校 土井富美子先生
- ③大阪市立港晴小学校 竹下侑里子先生
- ④大阪市立鷺洲小学校 古田豊子校長
- ⑤大阪市立住吉小学校 川口昌子先生
- ⑥大阪市立千本小学校 須摩憲治先生
- ⑦大阪市立中央小学校 山北人志先生
- ⑧大阪市立丸山小学校 松本康克校長
- ⑨大阪府立清水谷高等学校 岡本真澄先生
- ⑩関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター 研究員 宮元正博
- ⑪野菜文化史研究センター所長 久保 功氏
ゲスト 石橋明吉氏(なにわの伝統野菜研究所)
谷福江氏(田辺大根ふやしたろう会)
難波りんご氏(天王寺蕪の会)
岡田明寛氏(豊下製菓株式会社)

各学校での取り組みについて、現状や課題などを報告した。小学校では学習内容に「大阪らしさ」を

盛り込むため大阪らしい素材としてなにわの伝統野菜に注目し、植物栽培の教材として用いていることや、食育の観点から野菜を自分たちで栽培・収穫することを目的にしていることが述べられた。当センターではなにわの伝統野菜を文化遺産ととらえており、なにわの伝統野菜の歴史的・文化的背景を調査し、広報していきたいと考えている。各学校の報告からも、なにわの伝統野菜は多角的で、学問的な広がり期待できる素材であり、学校で取り上げることで児童や保護者、地域に広がっていくことが確認

できた。

今後は「なにわの伝統野菜」を普及させるため、小・中学校の副読本作成も予定している。

d. 社寺祭礼の縁日・屋台などの開催形態やその運営組織等の実態把握

初年度から収集してきたデータの解析を進めている。また、『なにわ・大阪文化遺産学叢書』として刊行する準備を進めている。

学芸遺産研究プロジェクト

①杭全神社および自治都市平野郷について調査する

4月には杭全神社で毎年おこなわれている「花の下連歌」を調査した。10月28日には地域連携企画第3弾「もめん博物館in平野」を実施し、「平野町づくり博物館」の調査を通じて、大阪市平野区周辺の文化遺産を調査・研究した。

②在坂武士の学芸に関する日記・記録の第1次成果を公開する

1月に『竹垣直道（御代官）日記』の天保14～15年分を翻刻した『なにわ・大阪文化遺産学叢書5 大坂代官竹垣直道日記（二）』を刊行した。日記の翻刻とともに、RA松本、RA内海、RA松永による論稿を収録している。今後は読み合わせ作業と並行し、索引作成作業を進める予定である。

③文化遺産インターンシップに学部学生・大学院生を参加させ、卒業論文・修士論文の作成を支援する

インターンシップ実習生として学部生2名を採用し、調査・研究の支援を行わせている。昨年度に引き続き、鬼洞文庫資料調査や『大坂代官竹垣直道日記』発行に際しての読み合わせ作業には、藪田研究員および山本研究員の指導と、RA松本の補助のもと、調査補助員として大学院生が参加した。

④文化遺産学の調査に出かける

7月に開催した国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」にもとづいて、東アジア地域やその他の国際的環境が歴史的

に形成した地域を調査するため、今年度は、長崎市へ視察に出かけた（詳細は、全体の活動報告を参照）。

⑤他の研究プロジェクトと共同で、文化遺産学フォーラム・国際シンポジウムを開催、PDに発表の機会を与える

7月に、他の研究プロジェクトと共同で、国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」を開催した。また11月には、本研究プロジェクトが中心となって文化遺産学フォーラムを開催した。研究例会については6月と1月に歴史資料遺産研究プロジェクトと合同で開催した。

研究例会

第1回：平成19年6月28日

「大阪の碑文・拓本と学芸」

松永友和（RA）

「大坂鉄砲方坂本鉉之助とその墓碑」

…「大坂代官竹垣直道日記」や「在阪漫録」（久須美祐雋の随筆）などの文献資料を用いて検討



した。

西田孝司氏（松原市文化財保護審議会委員）
「大阪南部に残る泊園書院藤沢南岳・黄鵠の揮毫と碑文—中河内郡恵我村別所の中山家資料を中心に—」

…近世期別所村の庄屋をつとめた中山家に残る日記や書画、松原に残る藤沢南岳・黄鵠が賛を書いた碑文をもとに、藤沢南岳・黄鵠や泊園書院について報告した。



第2回：平成20年1月22日

明尾圭造（芦屋市立美術博物館・センター研究員）
「大坂画壇の評価基準～菅楯彦を中心に～」

…近代大阪で日本画家として活躍し、大阪名誉市民第1号となった菅楯彦を紹介し、近代の「大坂画壇」研究の現状と展望について述べた。

古川武志氏（大阪市史料調査会）
「南木芳太郎と「上方」について」

…大正期以降見られた「大大阪」の動きに対して、大阪の文化（財）を記録・保存すべく活動した郷土史家南木芳太郎について紹介した。



第4回文化遺産学フォーラム

「なにわ・大阪の文化力—大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る—」

：平成19年11月24日

第1部 能勢人形浄瑠璃鹿角座公演

「能勢三番叟」「傾城阿波の鳴門」

第2部 [シンポジウム] なにわ・大阪の文化力

基調講演 中野三敏氏（九州大学名誉教授）

「江戸文化の中の「なにわ」」

…丹波屋理兵衛という一書肆の活動を通じて、江戸文化に大きな影響を与えたなにわの文化力について再認識する機会となった。

パネルディスカッション

中野三敏氏

井上宏氏（（社）生活文化研究所・「上方研究会」代表）

近江晴子氏（大阪天満宮文化研究所研究員・センター研究員）

酒井一氏（大塩事件研究会会長）

水田紀久氏（木村兼葭堂顕彰会代表）

高橋隆博（センター長）

コーディネーター：藪田貫（総括プロジェクトリーダー）

…大阪で文化活動を進めている諸団体の代表を務めておられる方がたに「なにわ・大阪の文化力」について語っていただいた。

※能勢の浄瑠璃および人形浄瑠璃の歴史、演目の解説や床本を収録した手引きをRA内海が中心となって編集し、当日配付した。

※「[企画展] なにわ・大阪の文化力—大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る—」に関しては、藪田貫がコーディネートし、RA松本が津田秀夫氏収集文書の展示品選定にかかわった。

⑥平成17年度採用のRAの学位論文を完成させる

本研究プロジェクトのRA松本は、近世大坂の本屋仲間についての調査研究をすすめる一方で、読書など人びとの知的活動に着目し、調査研究を行ってきた。自身が中心となって調査をすすめている『竹垣直道（御代官）日記』については、竹垣直道がおこなった書籍貸借や、和歌の贈答などの知的活動に着目し、論稿を執筆している。これは藪田研究員が編集し、論文集として刊行される予定である。また、

門真市の歴史文化講座「かどま 今昔」における講演で、大塩事件に参加し獄死した茨田郡士の家の書籍についての分析結果を報告した。その成果は、『大塩研究』第57号（平成19年10月）に掲載された。RA松本は、こうした成果にもとづいて学位請求論文を作成中である。

⑦学芸遺産研究の中間報告書を『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』として作成する

今年度の年次報告書『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』に中間報告書の内容を掲載する。

また、今年度の年次報告書には、鶴崎裕雄研究員が「文学に見る中世都市堺の残像—中世都市堺の遺産—西鶴の浮世草子『日本永代蔵』—」を執筆し、さらに、第一回研究例会報告者の西田孝司氏が、研究例会での報告をもとにして、論文「大阪南部に残る泊園書院藤沢南岳・黄鵠・黄坡の揮毫と碑文—中河内郡恵我村別所の中山家資料を中心に—」を執筆した。

⑧総括運営委員会のもとで中間総括をするとともに、自己点検評価委員会による自己評価を受ける

センターでは、総括運営委員会として、学内研究員から構成される推進委員会を設けており、ほぼ毎月1回のペースで委員会を開催しているが、今年度

は、中間総括のための推進委員会を開催し、これまでの活動の総括と今後の活動方針を議論した。また、内部評価だけではなく、センターでは3名の外部評価委員を委嘱し、すでに2年目の平成18年10月28日に第1回外部評価委員会を開催し、センターの活動についての外部評価を行い、その内容は年次報告書『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2006』に掲載している。

⑨その他

a. 八尾市植田家総合調査

植田家所蔵古書籍目録作成を目標として調査を継続している。これまでの調査概要を本書に掲載した。

b. 関西大学ミュージアム講座

関西大学博物館では、毎年学内外の研究者を招いて、ひろく地域の人びとに文化遺産についての講演を行うミュージアム講座を開催しているが、今年のテーマは「なにわ・大阪の文化遺産(二)」であった。本研究プロジェクトからは、有坂研究員と北川研究員が講演を行った。

7月11日：有坂道子（研究員）

「なにわの町人学者・木村兼葎堂」

7月18日：北川博子（研究員）

「浮世絵にみる大坂の歌舞伎」



八尾市植田家民具調査



杭全神社花の下連歌
（鶴崎研究員が執筆をつとめ、RA松本が参加）

歴史資料遺産研究プロジェクト

①道明寺天満宮所蔵歴史資料、関西大学所蔵泊園文庫本、本山コレクション金石文拓本の調査を完了する

道明寺天満宮所蔵歴史資料の調査は、『なにわ・大阪文化遺産学叢書4 道明寺天満宮宝物選』の公刊によりひとまず終了したが、未掲載の古文書・境内図などを含め、調査・収集資料の検討を進め、新たな成果の可能性を探っている。また、本山コレクション金石文拓本については、「日本の部」拓本の調査を進めた。今年度は、歴史的価値の高いと思われる拓本71点を選び、史学・国文学の大学院生の協力を得て解説文を作成し、『なにわ・大阪文化遺産学叢書7 木崎愛吉旧蔵本山コレクション金石文拓本選』として刊行した。未撮影分の拓本については撮影をすすめ、今後、データベースとして公開を目指している。なお、RA松永は、今年度刊行の『なにわ・大阪文化遺産学叢書7 木崎愛吉旧蔵本山コレクション金石文拓本選』に関わる東京での現地調査を行った。

②大阪府下の絵馬・道標、および街道関係文献資料の収集と一覧表化を進める

本山コレクション金石文拓本のなかに存在する大阪府下の道標・寺社燈籠について調査し、街道関係文献資料の収集を進めた。

③中国への歴史資料調査に出かける

7月に開催した国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」にもとづいて、中国上海市や蘇州市への調査を計画している(各研究プロジェクトの共通事項)。

④文化遺産インターンシップに学部学生・大学院生を参加させ、卒業論文・修士論文の作成を支援する

インターンシップ実習生として2名を採用し、調査・研究の支援を行わせている。また、今年度も関西大学博物館・図書館所蔵品の調査にあたっては大学院生に積極的に参加させ、拓本資料・写本史料の取り扱いや調査方法に習熟する機会を持たせた。調査に参加した学生・院生の多くが、調査成果を卒業論文・修士論文に盛り込んでいる。

⑤他の研究プロジェクトと共同で調査地における公開講座を開催する

10月28日に大阪市平野区で地域連携企画第3弾「もめん博物館in平野」を開催した。

⑥大阪文化遺産に関する文化遺産学フォーラム・国際シンポジウムを開催する

本山コレクション金石文拓本の調査の進展にともなって、拓本調査の成果と碑文に関して、学芸遺産研究プロジェクトと合同で、6月に研究例会を開催した。例会後には、今後の拓本調査や『なにわ・大阪文化遺産学叢書7 木崎愛吉旧蔵 本山コレクション金石文拓本選』刊行にむけての研究員ミーティングを行った。第2回目も学芸遺産研究プロジェクトと合同で、1月に研究例会を開催した。

研究例会

第1回：平成19年6月28日

「大阪の碑文・拓本と学芸」

松永友和 (RA)

「大坂鉄砲方坂本鉉之助とその墓碑」

…近年再建された坂本鉉之助の墓碑銘と本山コレクション金石文拓本にある坂本の墓碑銘との比較や、拓本にある木崎の裏書から大正期における大塩平八郎の乱の評価について報告した。



西田孝司氏 (松原市文化財保護審議会委員)

「大阪南部に残る泊園書院藤沢南岳・黄鵠の揮毫と碑文—中河内郡恵我村別所の中山家資料を中心に—」

…藤沢南岳とその周辺の人物像や、大阪南部にある南岳らの碑文・中山家所蔵の南岳らが揮毫した書について報告した。



第2回：平成20年1月22日

明尾圭造(芦屋市立美術博物館・センター研究員)
「大坂画壇の評価基準～菅楯彦を中心に～」
…明治期から昭和期にかけて大阪で画家として活躍した菅楯彦を中心に、「大坂画壇」に対する評価基準について報告した。

古川武志氏(大阪市史料調査会)
「南木芳太郎と「上方」について」

…近代大阪における郷土史家で、雑誌『上方』を主宰した南木芳太郎について、その生い立ちから『上方』の発行・休刊、南木の死に至るまでの経緯を報告した。



7月には、国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」を開催し、中国・韓国における歴史資料について、両国の研究者から教示を得た。また、11月には第4回文化遺産学フォーラム「なにわ・大阪文化力—大阪文化遺産の源流と系譜を辿る」を開催し、その関連行事として、関西大学博物館において、本山コレクション金石文拓本や津田秀夫文庫古文書、牧村史陽氏旧蔵写真の展示を行った。

⑦歴史資料遺産について学位論文完成を支援する

構想調書の段階では、3年目に学位論文完成を目指していたが、本研究プロジェクトRAの櫻木は、2年目の平成18年度に学位請求論文を提出し、博士号を取得した。学位論文は、本山コレクション金石文拓本の調査や出張調査での成果を盛り込んだ内容である。櫻木は今年度、PDとして採用され、新たに、松永をRAとして採用した。RA松永は、本研究プロジェクトでの成果をもとに、学位請求論文を作成中である。

⑧中間報告書を『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』として刊行する

今年度の年次報告書『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』に中間報告書の内容を掲載する。

⑨総括・運営委員会のもとで中間総括をするとともに、自己点検評価委員会による自己評価を受ける

センターでは、総括運営委員会として、学内研究員から構成される推進委員会を設けており、ほぼ毎月1回のペースで委員会を開催しているが、今年度は、中間総括のための推進委員会を開催し、これまでの活動の総括と今後の活動方針を議論している。また、内部評価だけではなく、センターでは3名の外部評価委員を委嘱し、すでに2年目の平成18年10月28日に第1回外部評価委員会を開催し、センターの活動についての外部評価を行い、その内容は年次報告書『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2006』に掲載している。

⑩その他

a. 菅楯彦日記の調査・研究

大阪名誉市民第一号であり、書家・画家としてなにわ文化の復興に生涯をかけた菅楯彦が残した日記の調査を開始するとともに、彼の事跡の検証を行う。

当研究プロジェクトの明尾圭造研究員(芦屋市立美術博物館)を通じて、芦屋市立美術博物館主催「浪華風俗を描く 菅楯彦の世界」(10月6日～11月18日)に事業協力した。同館が開催した3回の連続講座のうち、10月14日に行われた『菅楯彦とその時代』肥田皓三(元関西大学教授)の会場設営等に、PD櫻木、学芸遺産研究プロジェクトRA松本、当研究プロジェクトRA松永が携わった。

2007 年度会議報告

月 日	会 議 報 告
4月16日	第1回HQ会議
4月18日	第1回リーダー会議
4月18日	第1回月例会議
5月2日	第2回HQ会議
5月2日	第2回月例会議
5月16日	第1回推進委員会
5月24日	第3回HQ会議
5月30日	第4回HQ会議
6月13日	第2回リーダー会議
6月13日	第3回月例会議
6月30日	第1回合同例会
7月4日	第2回推進委員会
7月4日	第4回月例会議
8月1日	第5回月例会議
8月30日	第5回HQ会議
9月12日	第6回月例会議
10月17日	第3回推進委員会
10月17日	第7回月例会議
11月7日	第3回リーダー会議
11月7日	第8回月例会議
11月28日	第6回HQ会議
12月19日	第4回推進委員会
12月19日	第9回月例会議
1月16日	第2回合同例会
1月28日	第7回HQ会議
2月13日	第10回月例会議
3月5日	第5回推進委員会
3月24日	第11回月例会議

※HQ会議は、事務局会議です

研究進捗状況報告書の作成と提出

本センターは、平成17年度文部科学省学術研究高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター整備事業」に、「なにわ・大阪文化遺産の総合人文的研究」として採択された。規定により、研究プロジェクトの進捗状況について、実施研究組織の自己点検・評価と、第三者による把握および必要に応じた助言を行う等を通して今後の事業の推進に資するために、研究期間の3年目に研究の進捗状況についての中間評価を受けることになっている。今年度、本センターは研究開始から3年目にあたり、中間評価の対象となるため、書面審査に必要な研究進捗状況報告書の作成と提出が求められた。

研究進捗状況報告書の作成

センターでは、前年度の要項をもとに、研究助成課の助言を得ながら、平成19年4月下旬から報告書の作成に着手した。作成にあたって、センター全体に関する事項については、P.D.と事務局が、各研究プロジェクトに関する事項については、各研究プロジェクトリーダーとR.A.が担当した。報告書の編集は、センター長・総括プロジェクトリーダー・P.D.・事務局があたった。

主な作成日程は以下の通りである。

- 4/26 研究助成課より前年度の要項および作成についてのヒアリング
- 5/1 第1回編集会議
- 5/24 第2回編集会議
- 7/27 第1版を研究助成課に提出
- 8/2 第1版返却
- 8/8 第1版について研究助成課よりヒアリング
- 8/22 第3回編集会議
- 8/23 第2版を研究助成課に提出
- 8/30 第2版返却・ヒアリング
- 9/11 第3版を研究助成課に提出
- 9/14 第3版返却・ヒアリング
- 9/18 第4版を研究助成課に提出
- 9/19 第4版を完成稿とすることに決定
- 9/20 完成稿5部を研究助成課に提出

9/21 報告書を文部科学省に提出(森本理事長・研究助成課川畑次長)

上記の日程以外にも、H.Q.会議や月例会議、リーダー会議、P.D.・R.A.会議などにおいて、報告書作成について議論された。

研究進捗状況報告書の内容

報告書は、文部科学省により定められた書式である「様式1」・「様式2」と、センター独自に編集した「別紙資料」からなる。「様式1」はA4判片面刷り1頁、「様式2」はA4判片面刷り70頁、「別紙資料」はA4判両面刷り(カラー図版あり)194頁の計265頁であり、ガバットファイルに綴じ、1冊とした。報告書の内容は以下の通りである。

○様式1

「研究進捗状況報告書の概要」を、「1. 研究プロジェクト」・「2. 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要」・「3. 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要」の三項目について、A4判一枚にまとめたもので、報告書のダイジェスト版ともいえるものである。「3. 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要」においては、「(1) 調査・研究」・「(2) 教育活動(研究者・高度専門職業人養成・留学生)」・「(3) 特別プロジェクト」の三項目を立てて、それぞれの成果を述べた。

○様式2

3年間の研究進捗状況を、15項目にわたって記述するもので、A4判で枚数制限等はない。

内容は、「1. 学校法人名」・「2. 大学名」・「3. 研究組織名」・「4. プロジェクト所在地」・「5. 研究プロジェクト名」・「6. 研究代表者」・「7. プロジェクト参加研究者数」・「8. 研究プロジェクトに参加する主な研究者」というセンターの基礎的データについての記述から始まる。

次に、報告書の中心といえる「9. 研究進捗状況」では、「(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要」・「(2) 研究組織」・「(3) 研究施設等」・「(4) 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等」

の4項目からなる。「(4) 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等」では、祭礼・生活文化・学芸・歴史資料の研究プロジェクトごとに、文部科学省に平成16年度の申請時に提出した「構想調書」で掲げた年度計画の進捗状況と達成度を述べた。センター全体の研究行事と特別プロジェクト(関西大学創立120周年記念行事・「豊臣期大坂図屏風」の共同研究)についても、年度ごとに記述した。また、今後の研究方針や研究成果についても、本項目において記述している。「10. キーワード」では、「文化遺産学」・「祭礼遺産」・「生活文化遺産」・「学芸遺産」・「歴史資料遺産」・「地域還元」・「若手研究者育成」・「高度専門職業人育成」を挙げた。

「11. 施設・装置・設備・研究費の支出状況(外部の研究資金の導入状況)(概要)」・「12. 施設・装置・設備の整備状況(詳細)」・「13. 研究費の支出状況(詳細)」では、センターの施設面や事務的な運営状況について記述し、「14. 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)」では、研究員の3年間における業績一覧を記した。

「15. 選定時に付された留意事項とその対応策について」は、選定時の留意事項や対応策についての指摘がなかったため、「該当なし」とした。

○別紙資料

「別紙資料」においては、様式中に記載が認められない3年間の研究行事の広報用チラシや当日の様子を撮影した写真、センターの活動が取り上げられた新聞記事や各成果物の内容、P.D.・R.A.の業績一覧などを付した。目次は以下の通りである。

1. 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター構成メンバー一覧
2. 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター運営内規
3. 関西大学簡文館(なにわ・大阪文化遺産学研究センター)管理にかかる取扱要領
4. 保存処理分析作業室安全の手引き
5. 平成17年度 研究行事
6. 平成18年度 研究行事
7. 平成19年度 研究行事
8. 掲載記事 ー地域社会への発信ー
9. 成果物
 - I. なにわ・大阪文化遺産学叢書
 - II. NOCHS Occasional Paper

- III. 年次報告書
- IV. News Letter 『難波渦』
- V. NOCHS MAIL
- VI. 2007年大阪の夏祭りカレンダー

10. ホームページについて
11. 若手研究者の状況
12. 平成17年度 概要
13. 平成18年度 概要
14. 平成19年度 概要

中間評価の結果

平成20年3月末現在、中間評価の結果は未着である。結果については、来年度の年次報告書において公表する予定である。

長期インターンシップ実習

<受入から報告会までの日程>

- 6月6日（水）インターンシップ実習生面接
- 6月20日（水）実習の開始
- 12月20日（木）実習報告会

<2007年度インターンシップ実習生>

- 岩下夕岐子（関西大学工学部・化学工学科4回生）
- 田中美帆（関西大学総合情報学部・総合情報学科3回生）

①センターでの受入れ

今年度、当センターは、長期インターンシップ実習生受入れ開始からちょうど2年目を迎えた。昨年は、初めてということもあって、インターンシップ実習生の自主性に任せた実習ができず、それが今年度の最大の課題となった。

そこで、今年度は、研究行事の一つをインターンシップ実習生主導の下に行うことにした。とりわけセンターの調査・研究目的についてより理解を深めてもらうために、地域連携企画第3弾を担当させることとなった。開催までの企画立案から当日開催まで、RA宮元とRA影山の指導のもと、地域への聞き取り調査や下見など何度も現地に足を運び、地域の人たちと交流を深めた。

インターンシップ実習生2名は、地域連携企画の立案から当日開催までの約4ヶ月間で、コミュニティへの関わり方の難しさや、大学の研究機関の一員

として地域に接することを学んだ。

地域連携企画が終了した後は、その研究成果を当センター刊行の『Occasional paper No.6 もめん博物館 in 平野』としてまとめる作業に積極的に関わった。

地域連携企画は、当センターの研究理念に一番沿った研究行事であるので、実習生も企画立案→調査→準備→当日開催→研究成果のまとめ→地域社会への還元という一連の流れがよく理解できたものと思われる。

②実習報告会を通して

2007年12月22日（木）、関西大学において、長期インターンシップ実習報告会が開催された。今年度は、七つの企業・団体による受入れがあり、それぞれの実習生が順番に報告し、各企業・団体の担当者が出席し、コメントを付け加えた。

当センターでは、岩下氏が、長期インターンシップの希望動機として、自身が工学部に在籍していることから、自分の進路とは違う学問の世界を経験し、今後の人生の糧にしたいと話した。続いて、自らが担当した研究行事・地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」について紹介した。

報告後、コメンテーターからは、アイデアの独自性や勤務体制、プレゼンテーションの仕方についての厳しいご意見をいただいた。当センターは、他の団体や企業とは異なる社会的役割を担うため、今後プレゼンテーションの場でそのことをもう少し強調していけばよいと思う。

実習報告会全体を通じて、実習生への指導が担当者任せになりすぎていたこと、最後のプレゼンテーションも実習の一環なので、その指導を十分にできていなかったことなど、次年度以降に改善する課題がみえてきた。



③インターンシップを終えて—実習生の感想—

岩下夕岐子（関西大学工学部・化学工学科4回生）

私はこのインターンシップに参加した理由の一つとして、私が通っている工学部とは違う世界に触れてみたいという思いがあり、関西大学なにわ・大阪文化遺産学術研究センターを選びました。



インターンシップに参加して驚いたことがあります。それは、シンポジウムやフォーラムなどの行事の多さです。実習として、これらの行事当日の運営などもさせていただきました。受付での来賓の方々への対応や、ビデオカメラやボイスレコーダーで記録を取るという仕事を行いました。

私は実習を行う前は、センターでは文書や史料などをひたすら研究・調査しているような、内向的なイメージを思い描いていました。しかし実習を行った後では、私のイメージとはむしろ逆であったと思いました。研究・調査した結果を、どんどん地域・社会に還元していく、とても活発でやりがいのある場所だと思いました。ここで勤めている方がたがとても羨ましいです。私は普段、ただひたすら学校の授業を受け、課題をし、実験を行い、レポートを毎週提出するなど、一定の決められたことをこなしていく毎日で、それに比べると、センターでの実習は毎回新鮮で楽しいものでした。

特に、地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」では企画立ち上げ当初からメンバーの一員とさせていただきました。8月頃から実際に現地へ行き、地元の方がたの承諾を得て、何度も企画をより良いものへと練り上げ、企画当日までと、大変貴重な経験ができたと思います。

また、私は内向的で初対面の人と話すのは苦手な方だったのですが、今回のインターンシップに参加して、多くの方と出会い、積極的になれたと感じています。また、このインターンシップに参加する前までは働くことに対する自覚がいまひとつ足りなかったことに気づき反省しています。そして、これからはこのインターンシップでの経験を社会に出ても活かしていきたいと思っています。

最後に、6月から12月までの約半年間大変お世話になりました。よろしければ、センターでの行事で人手が足りないときは、ぜひお手伝いしたいので呼んでください。今まで本当にありがとうございました。



田中美帆

（関西大学総合情報学部・総合情報学科3回生）

昨年6～12月にかけて、「なにわ・大阪文化遺産学術研究センター」のインターンシップに参加させていただきました。

センターでは、パネル作りを学んだり、シンポジ



ウムのお手伝いをしたり様々な事を経験しました。これらの経験を来年度受講する博物館実習で十分に活かしたいと思います。

もっとも印象に残った10月28日の地域連携企画「町ぐるみ博物館」では、コンセプトやターゲットの決定、そして、当日の参加者への対応などすべてに携わりました。開催地である平野区が木綿の有名な栽培地であった事と、「町ぐるみ博物館」は区民同士、または区民と他の地域の人びととの交流の場となる事を目的としているので、コンセプトは「コミュニケーションを紡ごう」となりました。私たちは、糸紡ぎと染色の体験コーナーを中心とした出展を決めました。当日は、240人もの方がたに参加いただき大成功を収めました。しかし、その数字よりも、昔の糸紡ぎの様子を子供に語っているお年寄りの姿を見た時に、コンセプトの実現という実感を得ました。私自身としても、これまで全く経験のなかった「綿繰り・糸紡ぎ」の方法を学ぶ為、「八尾市立歴史民俗資料館」へ出向きました。大学の授業と平行しながらの準備、慣れない作業は、正直なところつらく思う事が何度かありました。しかし、子供たちが、私同様の初めての体験に目を輝かせ何時間も楽しんでいる姿には素直に喜びを感じました。更に、参加者の方がたに、最後まで安全に、滞りなく楽しんでいただき、その思いを抱いたまま帰っていただけた事も大きな自信に繋がりました。きちんと

計画を立て、それに則り、準備を進めていけば実を結ぶという貴重な体験ができ、多くの場面で助けていただいたセンターの方がたには、非常に感謝しています。

また、今までは希薄だった「町ぐるみ博物館」の出展者同士の繋がりも、それぞれの活動を記したオケージョナルペーパーの配布を機に、密になってほしいです。

以上のとおり、私がこのセンターで、学んだ事は、一般の企業で学ぶ内容とは違う部分が多いと思います。しかし、この体験で再認識させられたコミュニケーション能力や、持久力やスケジュール管理能力を培う事の大切さは、どこの企業でも変わりません。更には、日常生活においても、それらは基礎となる部分だと考えます。展示方法等の専門的な知識だけでなく、基本的な「生きる力」を向上させていただく事ができた点でも、このインターンシップに参加して良かったと思います。

